大学政策学部・朝日新聞社共同企画

公開講座シリーズ「現代を考える」を開催

政策学部と朝日新聞社の共同企画事業として「公開講座シリーズ『現代を考える』」を開催した。この企画は、大学の持つ学術研究の蓄積と、新聞社が有する最新の実態についての情報を融合することによって、現代社会における重要問題の本質に迫ろうというものである。単なる講演会ではなく、大学と新聞社のそれぞれが持つ人的資源を有機的に結びつけ、現代社会に対して今までにない視点や切り口からアプローチしようとした新しい試みである。

第1回は、「『平成の大合併』の第一楽章を総括する」と題して、2006年5月27日に開催した。今川晃教授と神田誠司朝日新聞編集委員が対談し、筆者がコーディネーターを務めた。全国規模で進められた大規模な市町村合併の現状と課題を多角的に検討した上で、道州制論議を含む現代日本の地方自治のあり方について踏み込んだ論議が展開された。聴衆の中には自治体関係者の姿も数多く見受けられた。

第2回（6月17日）は、「21世紀の組織と個人～人は何で頑張ってしまうのか～」というテーマで、太田肇教授と石前浩之朝日新聞大阪本社社会部記者の対談を川口章教授がコーディネートした。人はなぜ頑張ってしまうのかという「頑張り」のメカニズムを、現代組織の中から解き明かしていこうという論議は、多くの聴衆の関心を惹きつけていた。

そして第3回（7月15日）では、阿部茂行教授と長岡昇朝日新聞論説委員が「東南アジアの現状と日本」と題して対談を行った。東南アジアや南アジアの現地事情に詳しい両氏が、東南アジア諸国やインドの政治、経済の現状を紹介するとともに、今後の課題を日本との関わりの中で分かりやすく解説した。国際問題についての関心が強い同志社大学生にとっては、きわめて刺激的な内容であった。

以上のように、毎回、学生に加えて多くの一般市民の皆さんが来場され、討論に熱心に聴き入るとともに、会場との活発な質疑応答も行われた。

大学政策学部教授
真山　達志

第1回熊本キャンプを開催
―熊本バンドゆかりの地を訪ねて

2006年9月13～16日、初めての試みである『熊本キャンプ～Doshisha Spirit Tour～』がキリスト教文化センターと学生支援センターの共催で行われた。このキャンプの主旨は、同志社の「もうひとつの源流」とも言うべき「熊本バンド」のゆかりの地を訪ね、同志社に学ぶことの意味、そして自らを見つめ直そうということにある。

新島襄が京都に同志社を創立した翌年（1876年）、熊本からおよそ40名の学生が上洛し同志社に入学した。同志社が学校としての実態を整えるに至ったのは、後に「熊本バンド」と呼ばれるようになったこれらの学生たちの加入と活躍に負うところが大きかったという。彼らは、当時の熊本藩が近代化のために設立した熊本洋学校で学んだ俊英であり、彼らを指導したキャプテン・ジェーンズ（L・L・Janes）の影響によって洋学校生徒の中にキリスト教信仰を奉ずる者たちが現れ、彼らが花岡山で「奉教趣意書」を奉じたことがきっかけとなって、ついに洋学校は閉鎖。ジェーンズは新島の協力者であった宣教師のJ・D・デイヴィスに依頼して学生たちを京都に送ったのである。これらの学生たちの中には海老名弾正、小崎弘道、横井時雄、徳富蘇峰などが含まれていた。

今回のキャンプは学生17名、教職員5名が参加した。参加者は「熊本班」と「キリスト教班」に分かれ、6月から事前学習を行い、キャンプ中にそれぞれの成果を発表する機会を持った。さらに熊本バンドゆかりの地である花岡山はじめ、熊本草場町教会、徳富記念館、ジェーンズ邸、九州学院を訪れたほか、熊本校友会の方々のご厚意により有意義な交流会のひとときを持つことができた。

参加した学生からは、同志社の歴史や先人たちについて改めて多くのことを学んだこと、キャンプ参加者同士や校友会の方々を初め多くの新しい出会いがあったことなど、様々な体験や刺激を受けたという感想が寄せられた。このキャンプは、来年度も引き続き実施する予定である。

キリスト教文化センター助教授
越川　弘英